

祖父、 林 愛作のこと

林 裕 美 子

1. はじめに

論題から察せられる通り、私は林愛作の孫に当たります。愛作には八人の子供がいましたが、私はその六人目の子供、陸郎の三女になります。

愛作は阪神電鉄からの依頼で、現在武庫川女子大学に保存管理されている旧甲子園ホテル（現甲子園会館）の企画運営に携わりました。昭和二年頃のことです。

初代常務取締役兼支配人として建築家の遠藤新氏を招き、設計にも深く関わっています。私は祖父である愛作に会ったことはありませんが、しかし、今から 60 年以上も前に他界した愛作について興味を抱いてくださる方々が大勢おられることを光栄に思い、深く感謝する次第であります。

父の陸郎から祖父が日頃よく口にしていた言葉のいくつかを聞かされ、そのいくつかを覚えています。「虎は死して皮を遺し、人は死して名を遺す」という言葉が一番印象に残っています。その言葉通り名を遺した祖父の愛作に思いを馳せるとともに、このように祖父のことを語ることを不思議に感じております。

なぜ私が愛作について語ることとなったのか、簡単に経緯を述べたいと思います。私は、祖父の愛作が帝国ホテルの日本人初の支配人であったことは聞いていましたが、帝国ホテルとの繋がりはほとんどなく、旧甲子園ホテルに関しては、数年前に BS 放送のテレビ番組が作成されるまで、存在すら知らなかったのです。それが四年前、私の知人が当時の帝国ホテル社長であった小林哲也氏に、林愛作の孫である私のことを話したところから帝国ホテルとの繋がりが復活し、当時 93 歳だった父、陸郎とともに小林氏との会食が実現したの



図 1 林 愛作、原宿（自宅）の書斎にて 大正十三年（1924 年）

です。その会食において父は、それまで家族にも語っていなかった林愛作のこと、帝国ホテルへの思いを語っていました。そして「長年の心にしまっておいた思いを小林氏にお話しすることが出来て本当にほっとした。」と言っていました。翌年父は他界しましたが、その一周忌は祖父への供養を兼ねて帝国ホテルにおいて小林氏にも参列いただき執り行いました。私はこれまでに、祖父林愛作のお墓参りはしていましたが、供養まではしていませんでした。供養したからかどうか分かりませんが、今年に入り愛作について色々と調べなければならない事態となりました。これも、天国から祖父愛作と祖母のタカ、そして父陸郎によって動かされているような気がしてなりません。私はこれまでに関西を訪れる機会があまりありませんでしたが、帝国ホテルの小林氏からは是非とも旧甲子園ホテルを見に行くようすすめられました。それが7月はじめのことです。また、BS テレビの「甲子園ホテルの思い出」(2014. 1. 3 放送) に出演された武庫川女子大学の黒田智子教授とは、番組がきっかけで親交が続いており、この度、武庫川女子大学生生活美学研究所での講演と本稿の執筆を依頼されたという経緯があります。

表 1 林愛作と時代背景 (筆者作成 2017. 10. 12)

西暦	年号	年齢	出来事	西暦	年号	関連する出来事
				1867	慶応3年	フランク・ロイド・ライト誕生
				1868	明治元年	明治維新、廣弘願祝
1873	明治6年	9歳	10月12日 誕生(群馬県木田市)			
1885	明治18年	数え13歳	横浜へ			
				1889	明治22年	大日本帝国憲法発布、遠藤新誕生
				1890	明治23年	帝国ホテル開業
1892	明治25年	19歳	サンフランシスコへ			
				1894	明治27年	山中商会がニューヨーク支店を開業
1894	明治27年	21歳	ミス・リチャードソンと出会う	1894-1895	明治27-28年	日清戦争
1897	明治30年	24歳	マウントハーモンスクールに入学			
1899	明治32年	26歳	マウントハーモンスクールでゴルフをする			
1900	明治33年	27歳	山中商会ニューヨーク支店に勤務 (約10年)			
				1904-1905	明治37-38年	日露戦争
1908	明治41年	35歳	熟年にわたりフェノロサの遺言に沿い遺骨を三井寺に埋葬するため奔走	1908	明治41年	フェノロサがロンドンで客死
1909	明治42年	36歳	8月、帝国ホテルの初代日本人支配人となる	1909	明治42年	帝国ホテルが初めて日本人支配人の起用を決定
1910	明治43年	37歳	長濱タカと結婚			
1913	大正2年	40歳	新澤ゴルフクラブ創設に関与			
			帝国ホテルに見学に来ていた遠藤新(帝国大学学生)と出会う	1914-1919	大正3-8年	第一次世界大戦
1917	大正4年	44歳	新澤にフランク・ロイド・ライト設計の自邸(関東屋)が完成			
			遠藤を帝国ホテルの設計アシスタントとしてライトに推薦			
1919	大正8年	46歳	西男・陸郎 誕生			
1922	大正11年	49歳	取締役兼支配人を辞任(帝国ホテルを去る)			
				1923	大正12年	関東大震災
1927	昭和2年	54歳	甲子園ホテル開業のための阪神電鉄の招聘に応じる			
			アーネスト・フェノロサ墓の石玉塚を改葬			
1930	昭和5年	57歳	甲子園ホテル完成			
1931	昭和6年	58歳	支配人を辞任	1931	昭和6年	満州事変
1934	昭和9年	61歳	取締役兼副役を辞任(甲子園ホテルを去る)			
				1936	昭和11年	東京オリンピック(1940)開催決定(実現せず)
1942	昭和17年	69歳	海軍より新港ホテルの経営を任せられる	1939-1945	昭和14-20年	第二次世界大戦
				1944	昭和19年	甲子園ホテルがホテル経営に終止符
1951	昭和26年	78歳	2月10日 死去(神奈川県鎌倉市)	1951	昭和26年	遠藤新死去
				1959	昭和34年	フランク・ロイド・ライト死去

2. 林愛作の生い立ち

愛作について最も知られていることは、“帝国ホテルの日本人としての初代支配人”ということと、帝国ホテル新館建設の際、建築家フランク・ロイド・ライトを起用したことであろう。また、支配人としてホテル経営の改革をおこない、帝国ホテルのみならず日本のホテル運営の基礎を築いたとして、ホテル史上大変注目されているようである。本稿において、愛作の何について述べるべきか悩むところであるが、林愛作のことを知るためには、なぜ帝国ホテルの支配人になったのか、生い立ちからの歩みを伝えることが大切で必要であると考えます。

愛作は明治六年（1873 年）10 月 12 日、父千代吉、母キサの長男として群馬県、現在の太田市に生まれた。父の千代吉は生糸の取引をしていたが、相場で失敗をしたと聞いている。また愛作がまだ幼い頃に妻キサと離婚し別の女性と再婚しており、愛作の幼少期は必ずしも幸福であったとは言えないようである。小学校高等科を卒業するまで郷里にいたが明治十八年（1885 年）、数え年齢 13 歳の時に母方の親戚で加藤という人物を頼って単身横浜に移った。この人物は横浜でタバコ卸商を営んでいたらしく、愛作はそこで商店の小僧や子守り、土方仕事などに従事し、苦労を重ねながら学んでいたという。筆者は愛作が商品を包んだ大きな風呂敷包みを背負い得意先を回ったとか、芝居小屋も得意先のひとつで、そこで役者にならないかと誘われたが断ったというエピソードを父や叔母から聞いたことがある。このようにして 7 年間、横浜で過ごしたようであるが、おそらく愛作の住んでいた加藤家は、現在の山下町一帯にあり外国人居留地と目と鼻の先であったと思われる。外国人居留地には当時約 5 千人の外国人がいたといわれており、文明開化の最前線基地であった。貿易実務の実習や、外国の様々な文化に触れることができたので、多くの若者が全国から集まっていた。愛作には何度も飛び級で進級したという逸話も残っているが、東京大学、当時の東京帝国大学に入学するための予備教育機関である第一高等中学校の予備校で 1 年半学んでいたというから、東京帝国大学への進学を一時期考えていたことが予測される。非常に向学心が強かったようである。当時の外国人居留地には多くの宣教師もいたが、愛作はアメリカ人のプロテスタント宣教師に出会い、英語を学び教会へ通ううちに聖書に触れる機会を得た。そのようなことがひとつの大きな動機になり、明治二十五年（1892 年）、19 歳の時にサンフランシスコへと渡ったのである。

3. サンフランシスコ滞在時代

日本からアメリカ西海岸まで、当時は二十日近くかかったようであるが、渡米後、愛作はサンフランシスコの「シバタ」という店で働き始める。この店は絹製品などの日本の特産品を輸入販売していた。当時のサンフランシスコで最も大きく立派な日本の商店であっ

たという。明治二十七年（1894 年）、愛作が 21 歳の時、この商店で一人の中高年アメリカ人女性、ミス・リチャードソンと出会い文通が始まる。この文通をつうじて、ミス・リチャードソンは愛作のような見所のある青年は、東部で教育を受けるべきであると考えようになり、自らが保護者・後見人として、愛作をマサチューセッツ州のマウントハーモンスクールに入学させようと二年もの間尽力することとなる。マウントハーモンスクールは、将来を嘱望される若者のための東部の名門校である。



図 2 林愛作 22 歳
サンフランシスコにて

ミス・リチャードソンが愛作に対しておこなった尽力については、筆者の姉が昭和五十九年（1984 年）の春に、マウントハーモンスクールのキャンパスを訪れた際に知ることとなった。筆者には姉が二人いるが、上の姉、明子の夫がその当時、ボストンのマサチューセッツ工科大学に交換教授として赴任していた。そのために夫婦でマウントハーモンスクールを訪れたのであるが、その際にミス・リチャードソンが愛作を入学させようと奔走した 2 年間に、スクールの創設者ムーディやカトラー校長宛てに送った手紙や推薦状のコピーをいただいていたのである。100 年近くも手紙がオリジナルで保管されていたことに驚いたが、マウントハーモンスクールでは、在籍した学生一人一人に関する書類がこのようにきちんと保存されているということであった。

愛作は明治三十年（1897 年）、24 歳でマウントハーモンスクールに入学するが、入学までもに紆余曲折があったようである。愛作には聖書、英語、ビジネスについて多くを学びたいという強い思いがあったが、モットーは「節約し蓄えよ、しかるのちに取りかかれ」という独立独歩の精神であった。その為、学費を納めることが難しいと考えた愛作は、いったんは入学を断念したようである。しかし、そのように信仰心の厚いクリスチャンで、勤勉な愛作のことをミス・リチャードソンは決して見捨てなかった。ミス・リチャードソンにとって、愛作が信仰と精神の成長をとげながらどのように生きていくか、その姿を見守り続けることが晩年の大きな生き甲斐のひとつであったようである。そして、彼女との出会いが愛作の人生を決定したと言っても過言ではないだろう。

愛作は、自分を教育してくれたのはアメリカであると感謝の念を抱き続け、マウントハーモンスクール卒業後も同窓会への寄付などを通して母校との繋がりは深かったようである。それは愛作が帝国ホテル支配人時代にマウントハーモンスクールへ送った年賀状からも伺い知ることができる（図 3）。この年賀状も、筆者の姉がマウントハーモンスクールを訪問した際にいただいていたものであるが、他にもマウントハーモンスクールのカトラー校長夫妻が来日した際に愛作へ宛てた横浜・ニューグランドホテルのレターヘッドなどの

資料が残っている。また筆者の父は、大正の終わりか昭和のはじめ頃、カトラー校長が愛作を訪ねてきて一緒に食事をしたこと、戦後も夫婦で来日していたことを記憶していると話していた。そして、筆者の姉夫婦がマウントハーモンスクールを訪問した後数年間は、同窓会誌が筆者の父宛てに届いていた。日本で同窓会があった際は、両親と共に筆者も招待を受け、「100 年前に卒業した林愛作さんの息子さんご夫婦とお孫さんです」と、盛大に紹介してもらったことは懐かしい思い出である。



図3 愛作が母校に宛てた年賀状



図4 マウントハーモンスクールにて
(最前列・左から2人目)

4. 山中商会ニューヨーク支店時代

愛作はマウントハーモンスクールを卒業後、27歳の時に山中商会ニューヨーク支店で働き始めた。明治三十三年（1900年）8月16日付けで山中商会の用箋を使い、愛作がカトラー校長へ出した手紙がそれを証明している（図5）。山中商会というのは、大阪に本店を置く江戸時代から続く美術商である。山中家の養子となった山中定次郎（1866-1936）によって飛躍を遂げ、明治二十七年（1894年）にニューヨーク支店、明治三十二年（1899年）にボストン支店、明治三十三年（1900年）にはロンドン支店を開設した。その後も北京・シカゴに出店し「世界のヤマナカ」と呼ばれた会社である。当時日本では廃仏毀釈の運動が起こり貴重な文化財が大量に壊されていたが、山中商会によって海外に売却され命を永らえた為に今日我々が目にすることが出来る美術品もあるといえる



図5 山中商会の用箋を使ったレター
(1900/08/16 付け)

だろう。特にボストン美術館には、そのような美術品のなかでも、フェノロサ等によって買い上げられたものが所蔵されているといわれている。山中商会については『ハウス・オブ・ヤマナカ』（朽木ゆり子 2011）に詳しく、愛作についての記述もみられる。愛作は、欧米の富豪、コレクターの顧客に日本や中国の美術品を紹介し販売する仕事をしていた。この頃の愛作はニューヨークの社交界で受け入れられていた数少ない日本人の一人で、外務省もその伝手を頼りにしていたといわれている。後に帝国ホテル新館の設計に起用されるフランク・ロイド・ライトや、当時ボストン美術館に在籍していたアーネスト・フェノロサを知るのもこの頃であった。フェノロサは東洋美術史の専門家で、明治時代にお雇い外国人として来日し、東京美術学校（現：東京芸術大学）の設立にも尽力した人物である。日本美術を高く評価し紹介したことで知られているが、ボストン美術館在籍中に親しかったモースやピゲローとともに、山中商会ニューヨーク支店開設を援助・協力していたということである。フェノロサの功績についてはよく知られているが、その墓がどこにあるかということまでは知られていないのではないだろうか。それは滋賀県の三井寺の法明院にある（図 6）。出張先のロンドンで急死したフェノロサを、その遺言に従い、妻のメアリーからの依頼で数年がかりで三井寺に移したのが愛作であった。愛作は明治三十三年（1900 年）からの約十年間、山中商会ニューヨーク支店において活動した。この間、欧米の一流ホテルに宿泊することが多かったが、その経験が後のホテル経営に大いに反映されたと思われる。



図 6 アーネスト・フェノロサの墓
（滋賀県大津市園城寺町）



図 7 山中商会で使用していた名刺



図 8 山中商会に勤めていた頃の愛作
（左から 3 番目）

5. 帝国ホテルの支配人へ

帝国ホテルは明治二十三年（1890年）に開業した。日本においては当時、ホテルといえ
ば帝国ホテルのことを指すというような風潮であったが、開業から二十年にわたり支配人
は外国人であった。明治二十二年（1889年）、大日本帝国憲法が發布され徐々に近代国家と
しての体裁を整え、明治二十七年（1894年）から明治二十八年（1895年）の日清戦争、明
治三十七年（1904年）から明治三十八年（1905年）の日露戦争を経て、日本も世界の一等
国であるという意識を持ち始めた。そのころ大正時代の経済人、渋沢栄一は欧米からの来
訪者が多くなったため西洋人の泊まれるホテルの必要性を感じていた。そして明治四十二
年（1909年）、帝国ホテル経営陣は、日本人を支配人に起用することを決めた。当時の経営
陣には渋沢栄一、大倉喜八郎（大成建設の前身の大倉土木社長・長男の喜七郎がホテルオ
ークラ創設者）、益田孝（三井合名社長）らが名を連ねていたが、当時アメリカで古美術商・
山中商会ニューヨーク支店の主任（事実上の実務責任者）であり外国通であった愛作に白
羽の矢を立てたのである。これに対して愛作は当初ホテルからの申し出を固辞していたが、
ホテル側は諦めず、渋沢栄一や大倉喜八郎のみならず、大阪の経済界の重鎮であった松本
重太郎や藤田伝三郎までも動員し、直接の説得のみならず、山中商会の社長を通じた間接
的な説得にも乗り出した。皇室（宮内省）を筆頭株主とする国策ホテルの執拗な意思が個
人の意思を制圧したのである。明治四十二年（1909年）7月16日付けで、渋沢栄一から松
本重太郎へ愛作の説得を依頼した手紙が今も林家に残されている（図9）。

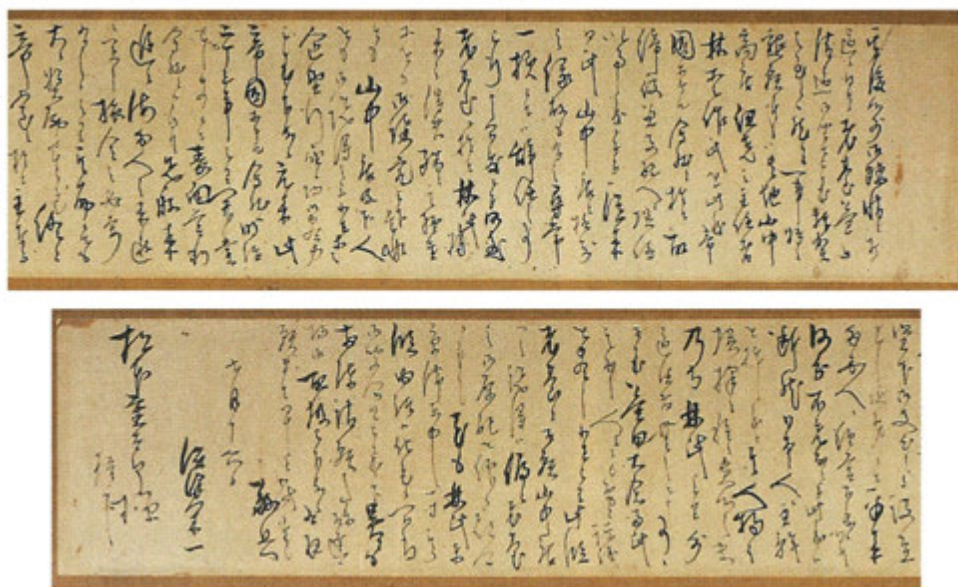


図9 明治四十二年、渋沢栄一が帝国ホテルに日本人支配人招聘のため、
関西財界の重鎮・松本重太郎にあてた書簡。当時ニューヨークで
古美術商山中商会主任だった林愛作への働きかけを要請している。
（提供：愛作三女・斉藤保子氏）

そしてその直後の 8 月、愛作はホテル経営の一切を任されることを条件に、帝国ホテルの日本人初の支配人として着任した。愛作はこの時 36 歳であった。

着任後、愛作は際立った手腕を振るい、「帝国ホテルの林」か「林の帝国ホテル」と言われるようになる。愛作が支配人としてまず行ったことは、帝国ホテルの現状の詳細な分析と診断であった。それに基づきアイデアに富んだ改革案を次々に策定、実行していったのである。また、ホテル経営の理念を明確に打ち出し、ホテルを単なる宿泊の場所でなく、顧客に快適さとやすらぎを与えながら相互に交流する「社交場としてのホテル」「新しい都市空間の創出」という斬新な視点でとらえていたといわれている。愛作が行ったホテル経営刷新と対外的な諸活動を以下に列記する。

〈ホテルの経営刷新〉

- ・ホテル施設設備の改善に大胆な投資
- ・従業員及びその家族のための共済会を設ける
- ・複式簿記の導入
- ・市内観光のため自動車部を創設
- ・ホテル内郵便局を設ける
- ・乗車券類委託販売及び手荷物受託取り扱い
- ・英文雑誌「MUSASHINO」（有料広告掲載誌）の発行
- ・自営のランドリー設置
- ・宴会部門の重視
- ・社交の場としてのホテルを重視
- ・新館（ライト館）の建設

〈対外的諸活動〉

- ・ジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）の設立に関わる
- ・東京ゴルフ倶楽部の創設に関わる
- ・「櫻の會」の創設に関わり、機関誌「櫻」を発行
- ・体育協会の運営に関わる
- ・東京中央卸売市場（青果物）の設立に関わる
- ・群馬県育英会の創設に関わる
- ・米国議員団の私邸での接待（日米が微妙な関係になりつつある時期）

単にホテル経営だけでなく様々な分野に活動の場を広げ、日本の文化の発展と海外に向けた宣伝活動をおこない、海外からの顧客誘致にも意を注いだ。また体育協会においても、幅広い海外の知己を活かし、オリンピックの招請（1940 年幻の東京大会）などにも貢献したようである。そのような活動を行うに際しアメリカからの視察団の接待などもおこなっていたことが記録として残されている。



図 10 帝国ホテル支配人時代の名刺

6. 結婚

愛作は明治四十二年（1909 年）から大正十一年（1922 年）までの約 12 年間、帝国ホテルの支配人を務めた。その間、就任翌年の明治四十三年（1910 年）5 月 12 日に、17 歳年下の長濱タカと入籍している。愛作とタカは同年 1 月 18 日に帝国ホテルで結婚式・披露宴をおこなったことが図 11 の結婚式披露宴案内状により明らかであり、これは帝国ホテルにおいて初めての結婚式・披露宴であったことが予測される。その時の写真（図 12）は当時の結婚式の様式や衣装のことを知る貴重な資料であろう。また愛作とタカの披露宴の媒酌人は、当時「タバコ王」と呼ばれ、事業を多角化して村井財閥を形成、村井銀行社長としても活躍した帝国ホテル理事の村井吉兵衛

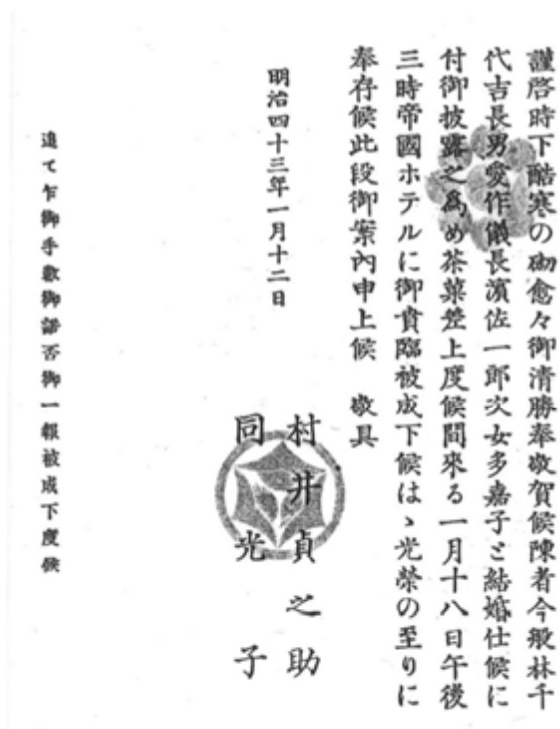


図 11 愛作とタカの結婚式・披露宴 案内状

の義弟、村井貞之助夫妻であったと聞いている。

長濱タカは、明治二十三年（1890年）9月20日、長濱佐一郎とテルの三女として生まれた。父の佐一郎は熊本県土族の長男で藩主細川侯に仕え、西南の役の際、19歳にして六尺三寸の大男であり、官軍として従軍したということである。維新後の明治十五年（1882年）に上京し、明治十七年（1884年）には横須賀へ移り住み、明治二十五年（1892年）より事業家として歩み始め、次々に事業を手掛けていった。当時横須賀で大きく事業展開をしていた大倉土木組（現大成建設）を範とし、土木建設業を重視して「長濱組」を設立したが、これを事業の中心としたことが事業家としての成功へと繋がったようである。余談ではあるが、同じく横須賀で成功をおさめた人物に小泉又次郎（小泉純一郎元首相の祖父）がおり、家が隣であったということである。また、本稿では帝国ホテルについて詳細は述べないが、図13のような資料からも、長濱組がその建設に関わっていたことがうかがえる。



図12 愛作とタカの結婚式



図13 大正十年（1921年）ライトを中心に一堂に会した帝国ホテル建築関係者達
前列右から5番目：フランク・ロイド・ライト、前列右から4番目：林愛作、
前列左から4番目：（建築家）遠藤新、前列左から5番目：（構造担当技師）
ポール・ミュラー、前列右から1番目：長濱佐一郎代理、養子の顕達^{けんたつ}

さて妻のタカであるが、当時は東京の三大美女の一人と謳われていただけでなく、ゴルフやスキーを楽しむ進歩的な女性であったことが新聞の社交欄に記載されている。タカがゴルフをしていた理由として、愛作が東京ゴルフ倶楽部創設に関与していたことが考えられるが、図15からわかるように、着物姿にも関わらず立派なフォームのように思われる。スキーについては愛作は上級者であったようだが、タカは愛作についていく程度であったようだ。筆者の父は幼い頃赤倉にスキーをしに何度か行ったことがあると話していた。



図14 妻のタカ



図15 ゴルフをするタカ
(東京ゴルフ倶楽部史料室 蔵)

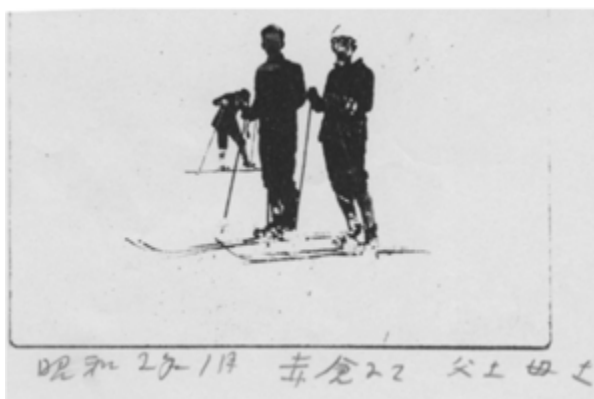


図16 赤倉でスキーをする愛作とタカ

7. ゴルフ場建設

愛作が、オリンピック招致に貢献するなど対外的な活動にも力を入れていたことは先にも述べたが、東京ゴルフ倶楽部の設立もそのひとつである。図17はゴルフ界では有名な写真である。左から2番目が愛作であるが、3番目にいる筒袖姿のキャディは、のちにプロゴルファーになる安田幸吉である。安田幸吉は、平成十五年（2003年）に98歳で他界したが、日本プロゴルフ協会の初代理事長でありコース設計家としても手腕を振るい、プロゴルフ界で初めて叙勲の栄誉を授かった人物である。安田幸吉は機会あるごとにこの写真を「思い出の一枚」として紹介していた。以下に、安田幸吉がある雑誌に書いた興味深い記事を紹介する。

中央に写っているのが私です。大正四年、11～12歳。近くの東京ゴルフ倶楽部駒沢コースで、小遣い稼ぎにキャディを始めた頃です。当時はメンバーも少なく、日曜でも30

人くらいだったと思います。コースまでは、たいていの人が馬車か自転車でやって来たものです。それに“お客さんはゴルフ場にわがまを言いに来るものだから、そのわがまを聞いてあげなさい”とも言われました。確にお客さんはわがまなところがありましたが、人情味もありました。

キャディの手当では9ホールで10銭。大の男が一日働いて40～50銭の時代でしたから、子供の小遣いとしては、いいほうだったと思います。その後18ホールになりましたが、手当のほうは15銭と安くなってしまいました。

写真手前にあるのは、木で作った“サンド・ボックス”というもので、箱の片側に砂、もう一方に水が入っていました。この砂を水にぬらしてティ・グラウンドに置き、今のティ・ペッグの代わりにしていたのです。後ろのクラブハウスは、大正博覧会の建物を改造したものです。木造ではありますが、当時としてはなかなか立派なクラブハウスでした。



図 17 東京ゴルフ倶楽部で。大正四年
左から2番目：愛作
左から3番目：少年時代の安田幸吉

また安田幸吉は、自伝に次のように書いている。

自分は東京府荏原郡駒沢村の農家の四男として生まれましたが、当時の駒沢村は呑川という小川の周りに僅かな水田と畑があるだけで、高低差の無い雑木林や竹林が広がっていました。そののどかな駒沢に大正二年、突如ニューウェーブが押し寄せてきました。生家から200メートルの場所に東京ゴルフ倶楽部駒沢コースができたのです。現在の駒沢オリンピック記念公園辺り一帯の場所にあたります。

二頭立ての黒い馬車で、皇族、華族、財界トップ、外国人らがやってきて、小学4年生の自分は、いつかそこでキャディ見習いになっていました。小遣い稼ぎより行儀見習いのつもりでした。

筆者の父陸郎はゴルフが大好きで HDCP7 までいったが、安田幸吉には当時いくつもなかったゴルフ練習場、赤坂山王一丁目のバーディークラブで出会い教えてもらっていたという。安田幸吉から「あなたのお父様は、ゴルフの日本の祖先と言ってもいい方なのですから、もっとうまくしてくれないと困りますよ。」と言われていたと聞いている。大正八年（1919年）、これは筆者の父陸郎が生まれた年でもあるが、5月に発行された雑誌「同人」において、愛作がゴルフについて述べたものが記載されている。そのなかで、明治三十二年（1899年）に「ゴルフという遊戯」をアメリカの学校でやったこと、この遊戯を行えば

必ず 20 年間活動期を伸ばすこと
受け合いであること、日本人とし
てはゴルフの祖先であり、10 年前
に帰朝しゴルフの遊び場を作りたい
と各方面の人に話をしてみたが、賛
成する者は 2、3 人のほかい
なかったこと、しかしその後、愛
作の説得やアメリカでのゴルフの
発展などもあり賛成者が増え、ゴ
ルフ場建設の機運も高まったこ
と、場所の選定に東京の近郊を歩
きつくしたと言えるほど歩いたこ
となどを述べている。



図 18 駒沢に創設された東京ゴルフ倶楽部
馬力による芝手入れの様子
(東京ゴルフ倶楽部史料室 蔵)

愛作が東京ゴルフ倶楽部創設になぜ関わったのか、その詳細を示す記録は残っていないが推察できることは、井上準之助との出会いである。井上準之助（明治二年（1869 年）生）は日本の政治家、財政家であり、日本銀行第 9・11 代総裁でもあり大蔵大臣も務めた「第二の渋沢」と称される存在となった人であるが、明治四十年に日銀ニューヨーク支店に赴任、ニューヨークで日本人の集まる「日本クラブ」に出入りしていた際、山中商会ニューヨーク支店にいた愛作と出会っていたことが考えられる。井上はやはり日本クラブで出会った新井領一郎（注）からゴルフをやるように言われ、すっかりゴルフの魅力に取りつかれ、帰国後ゴルフ場の設立呼びかけ人となり、これが東京ゴルフ倶楽部創設へ進むことになる。

注）新井領一郎（1855-1939）は、群馬県桐生市出身の実業家、日米生糸貿易の創始者。在米日本人とアメリカ人との社会交流を図った日本クラブと、日本文化の発信拠点となったジャパン・ソサエティの創設者の一人。日本にゴルフを広めた日本人初のゴルフ・プレーヤーの一人。日本クラブを通して日本人メンバーにゴルフを広めた。孫の松方春子は、駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの妻、ハル・松方・ライシャワーとなった。

なお安田幸吉プロが書いた記事の中に、東京ゴルフ倶楽部のクラブハウスは大正博覧会の建物を改造したもので、という件があるが、大正博覧会の建物は、東京ゴルフ倶楽部設立の中心人物であった井上準之助が五千元で譲り受けて移築した大正博覧会の迎賓館であり、高貴な方しか使えなかったそうである。よって一般のゴルフ場訪問者は隣地に建てられた愛作の自宅「朋来居」をクラブハウスのように使っており、行きに帰りに立ち寄っていたらしい。

8. 朋来居の建設

さて、愛作はそれまでホテル内の社宅住まいであったが、家族も増え、自宅の建設を思い立ち計画する。その時期がゴルフ場の土地探しと重なっていたこともあり、結局大正二年（1913年）に駒沢に創設されたゴルフ場、東京ゴルフ倶楽部に隣接する1万余坪の土地に、フランク・ロイド・ライトの企画設計で「朋来居」（友来たりしときに憩う場、の意と思われる）と名付けられた住まいが建てられたのが大正六年（1917年）とされている。現在創立104周年となる東京ゴルフ倶楽部創立時の駒沢コース決定は、愛作の助言によるものとされており、現在埼玉県にある東京ゴルフ倶楽部のクラブハウス2階には史料室が設けられ、愛作の功績が大きく展示されている。



図19 駒沢「朋来居」の全景スケッチ（日本大学 谷川研究室）

筆者の父は朋来居完成の2年後に生まれたが、東京ゴルフ倶楽部と駒沢の家（朋来居）を良く記憶していた。ゴルフコースは庭の先にあり、木がなくて松がポツンとあるだけ。馬車や自転車でゴルフ場を訪れる人達は、愛作がホテルで宴会やパーティーをする習慣を提唱していたからか、ゴルフの帰りには朋来居に立ち寄り、園遊会のようなことをしていたと話している。また、駒沢の家では和食はお手伝いさん、洋食はリーさんという中国人夫婦が作り、母屋でパーティーなどがある時は幼い子供たちはこの夫婦に預けられ、時々抱っこされて扉の隙間からパーティーの様子を見せてもらったことも記憶していたようである。

朋来居は住宅設計を得意とするライトによって、プレイリーといわれる草原の中に佇むイメージで表現されており、水汲みの風車などもあった。ライトが日本に遺した建築の中でも最もライトらしい建物ではないだろうか。朋来居は愛作が名付けたものである。父の話によるとリビングにはライトが設計した家具がそろっていたという。庭の一角には池があり、小さな船を浮かべて遊んでいたようである。庭の風車は水を汲み上げ池に送っていたのだろう。窓からは地平線が見渡せ、アメリカ式の農家のようなゆったりとした風景であった。家の横には畑があり、帝国ホテルに使う西洋野菜を栽培し、採れたものは馬車でホテルに運んでいたという。また鶏や豚も飼っていた。尚、この駒沢の家（朋来居）の一部は昭和二十五年（1950年）から株式会社電通が所有し、八星苑として保存している。



図 20 朋来居の入り口門



図 21 庭の池で水遊びをする子供達とタカ



図 22 客間の窓際に立つ愛作



図 23 庭の様子（中央に愛作、右奥に風車が見える）



図 24 現在の朋来居



図 25 玄関（「朋来居」の看板）

ゴルフ場の話から駒沢の住まいへと話題を移してきたのだが、愛作はアメリカから帰国後、赤坂・駒沢・原宿・大塚、といくつかの住まいを経て疎開先の鎌倉で最期を迎えることとなった。そしてその間に愛作とタカは五男三女の8人の子供に恵まれている。

愛作が駒沢にいた当時は帝国ホテルの支配人であったが、平日は子供達も一緒に帝国ホテルに住まい、週末になると駒沢へ車で通っていたとの記述が残っている。愛作は自らがホテルという現場に住まい、客が何を求めているかを常に考えていたものと思われる。それによって、快適さとやすらぎを与える社交場としてのホテル、新しい都市空間の創出の実現に向け斬新なアイデアを出していったのではないだろうか。

その帝国ホテルを愛作が去ったのは49歳の働き盛りの時で、関東大震災前年の大正十一年（1922年）のことであった。フランク・ロイド・ライトを起用し新館の建設計画に取り組んでいたのだが、工事の途中、開業以来の本館が全焼するという事態が起こる。また新館、いわゆるライト館の度重なる設計変更や工期の大幅な遅れなどもあり予算に重大な超過が生じた。愛作はそれらの責任を問われ、ライト館建設の途中で詰め腹を切られる形で帝国ホテルを去ったのである。



図 26 タカと子供達



図 27 幼い陸郎を抱く愛作



図 28 全員が揃った貴重な家族写真

9. 帝国ホテル支配人辞職後

帝国ホテルを去って以降、愛作は手掛けた仕事に運が伴わなかったのか成功を収めたとは言い難く、ことごとく中断あるいは計画倒れに終わっている。ホテル計画では「幻の小田原ホテル」の計画が実現なかった。

ここで、筆者の父であり愛作の四男にあたる林陸郎が語っていた興味深い話を紹介する。陸郎が中学を卒業する頃アメリカに留学しようと考えた。しかしお父様（子供達は愛作のことを



図 29 タリアセンのライトの自宅で
昭和二十七年頃

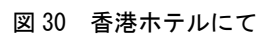
左：林陸郎（愛作の四男）
右：フランク・ロイド・ライト

こう呼んでいた）から「やめておけ。とにかく日本で帝国大学に行きなさい。留学するのはその後でよい。」と言われた。なぜそのようなことを言ったのかというと、愛作自身が日本の大学を出ていなかった為に、苦しい時に助けてくれる友人がいなかったのだという。当時は旧制高校や大学の同級生・同窓生という縁で、困っていれば助けようというような風潮があった。そのような意味の人脈というものは確固として存在し、愛作は折に触れてそれを感じていたのかもしれない。筆者はこの話を思い出すにつけ、愛作が日本で生きていくことになったのは歴史のいたずらであり、アメリカで生き続ける方が良かったのではないだろうかとする気持になる。愛作の助言に従ったからかはわからないが、父陸郎は結局、京都帝国大学経済学部を卒業した。因みに、父と同様に東京で生まれ育った筆者の次姉、愛子も京都大学文学部の卒業生である。愛子は祖父愛作が亡くなった1ヵ月後に生まれたことからこの名が付けられた。父がなぜ京都帝大を選んだのか真相はわからぬままであるが、父が幼い頃、愛作が甲子園ホテルの建設に関わっていた際、愛作に連れられ度々魚崎に来ていたと言っていたので、関西方面へも馴染みがあったのかもしれない。その父陸郎は、若い頃にタリアセンにライトを訪ねている。図29はその際、父とライトが並び撮影されたものである。

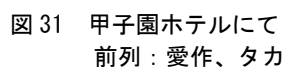
また、父陸郎から聞いた話の中で、甲子園ホテルについて「櫻正宗の別荘で遠藤さん（遠藤新）とお父様（愛作）が毎日毎日図面を描いていて本当に楽しそうだった」というものがある。先ほど述べたように、子供達も愛作と共に度々魚崎に来ていたといい、その為かはわからないが、愛作の三男、小三郎は灘中学校の卒業生である。

甲子園ホテルから手を引いた愛作は、昭和十五年（1940年）67歳の頃、当時は無職であったと思われるが、鎌倉の自宅から東京に出かけては人に会い、新しく始める事業の相談などをしていたという。また明治期以来の社交クラブである交詢社にも度々立ち寄っていたようである。そのような中、ニュートーキョー支配人の紹介によって、占領地であった

図 30 は香港ホテルでの写真であると思われるが、この写真から、愛作がリボンをつけていることが見て取れる。愛作も妻のタカも、世の中の大勢の人々が着ているものではなくステージ衣装のような格好を好み、洋服に対する興味が非常に強かったように思われる。筆者の叔父の七郎は、19 世紀を舞台にした映画の衣装のような浮世離れた洋服ばかりを着ていたし、叔母達や筆者の姉も同じくステージ衣装のような様式を好み着用しているのは、愛作の影響によるものかもしれない。



愛作の娘であり筆者の叔母である保子の家に、古く汚れた丸い缶が置いてあったのをある時開けてみたところ、8ミリフィルムのようなものが入っていた。しかしそのフィルムはところどころちぎれており見られる状態ではなかったのであるが、たまたま隣人に NHK 勤務の方があり相談したところ、見られる状態に修復することができたのである。そこには



甲子園ホテル建設中の映像が映っていた。愛作や遠藤新、愛作の家族が甲子園ホテルと共に映っている。この映像は、先にも述べたBSテレビの「甲子園ホテルの思い出」作成の際、叔母保子の孫が、その秘話と共に提供したものである。在りし日の愛作やその家族が活動している姿を目にすることの出来る大変貴重な映像であるといえるだろう。

本稿では、愛作の生きざまのほんの一部を述べたに過ぎない。帝国ホテルを追われる形になった愛作が、申し出を断りそのままアメリカで過ごしていたらどのような人生になっていたのか、その場合は筆者もこの世にはいないわけであるが、愛作について知れば知るほど、日本に帰ってきたことが愛作にとって良かったのか否か考えさせられるのである。

筆者の父陸郎は、愛作の考え方の基本にあったのは一貫してキリスト教であったとも話していた。また愛作は短歌を盛んに詠んでいた。日記やノートに書き記された自作の歌は千首を下らない。さらに万葉から近代の歌人に至るまで、気に入った歌は徹底的に書き写すこともしていたようである。古事記や日本書紀なども熟読しており、例えば天照大神、神武天皇、崇神天皇、桓武天皇などの事業を書き留めたものも見られる。



図 32 林愛作の墓
神奈川県鎌倉市 光則寺
黒田智子教授撮影 2017. 春

筆者は本稿に先がけた講演の為に様々な資料にあたり、たくさんの興味深い発見があった。しかしまだ十分ではないと感じている。日本に戻ってからの住まいのことも、一軒一軒の家について示し、エピソードを紹介するべきであると考えている。

昭和二十六年（1951 年）愛作は 78 歳でこの世を去り鎌倉の光則寺に眠っている。図 32 は愛作の墓である。筆者は三井寺のフェノロサの墓を近々初めて訪問する予定である。愛作が何度も訪れたであろうその場所で愛作を感じてみたいと考えている。

（2017 年 10 月 30 日、生活美学研究所本年度第 2 回甲子研究会における講演に基づく）

コーディネーター 武庫川女子大学生生活環境学部教授 黒田智子

【参考文献】

- 1) 武内孝夫著 林愛作ノートⅠ～Ⅶ
（『在』2003 年 6 月第 13 号～2006 年 12 月第 20 号に連載）
- 2) 長浜つぐお著『横須賀市参事会の人々』
（2001「横須賀の文化遺産を考える会」発行）
- 3) 朽木ゆり子著 2011『ハウス・オブ・ヤマナカー東洋の至宝を欧米に売った美術商』
新潮社